令和４年度

竹田城跡遺構現状確認調査現地説明会資料
～二の丸～

2023.2.19
朝来市教育委員会文化財課

1. はじめに

朝来市では、平成 29 年 3 月に策定した『史跡竹田城跡整備基本計画』に基づき、平成 30 年度から本格的な竹田城跡の整備事業に取り組んでいます。

計画 5 年目の今年は、大手道、南二の丸周辺の整備と二の丸の遺構確認調査を進めています。この確認調査は史跡内の適切な保存と活用を図るため実施するもので、現状遺構の評価と新規遺構の確認を目的として実施しました。

2. 竹田城跡の位置

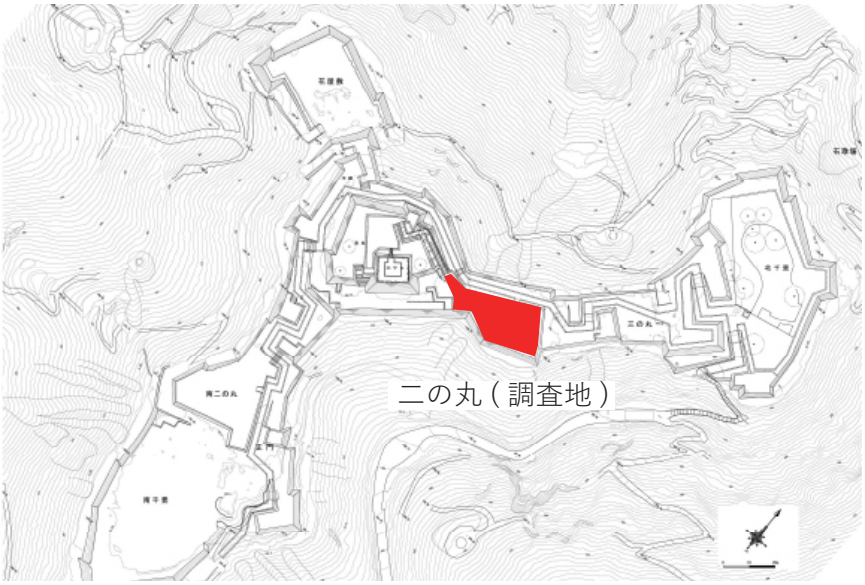
竹田城跡は、兵庫県のほぼ中央部の但馬地域南端に位置する朝来市に所在しており、円山川左岸の古城山山頂一帯に築かれています。但馬・丹波・播磨の国境から程近く、城跡からは山陰道等の主要街道を見下ろすことができることに加え、山麓の城下町が街道を取り込む形で形成されているなど、交通の要衝を抑えることを意図した立地となっています。

3. 竹田城跡の沿革

竹田城は、山名持豊（宗全）の配下であった太田垣氏の城として築かれ、7 代にわたって城主を務めたとされていますが、永禄 12 年（1569）以降、天正 8 年（1580）までの 3 度にわたり織田方の攻勢を受け、太田垣氏の支配は終焉を迎えました。

その後、天正 10 年（1582）に桑山重晴、天正 13 年（1585）に赤松広秀が竹田城の城主として入城し、石垣の城郭を築造しました。最後の城主となった赤松広秀は慶長 5 年（1600）までの 15 年間にわたり城主を務めましたが、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いでは西軍に属し敗者となり、さらに鳥取攻めにおける城下焼き打ちの罪により自刃したことにより、竹田城は廃城となりました。

竹田城については元和元年（1615）より生野奉行（享保元（1716）年以降は生野代官）の管理下に置かれました。しかし、大規模な破却は免れたようで、城跡の一部石垣は現在まで残されています。昭和 18 年（1943）に国史跡に指定され、平成 21 年（2009）の追加指定を経て、現在に至っています。



調査位置図

二の丸平面図（S= 1/ 1 0 0）

4. 二の丸の調査結果

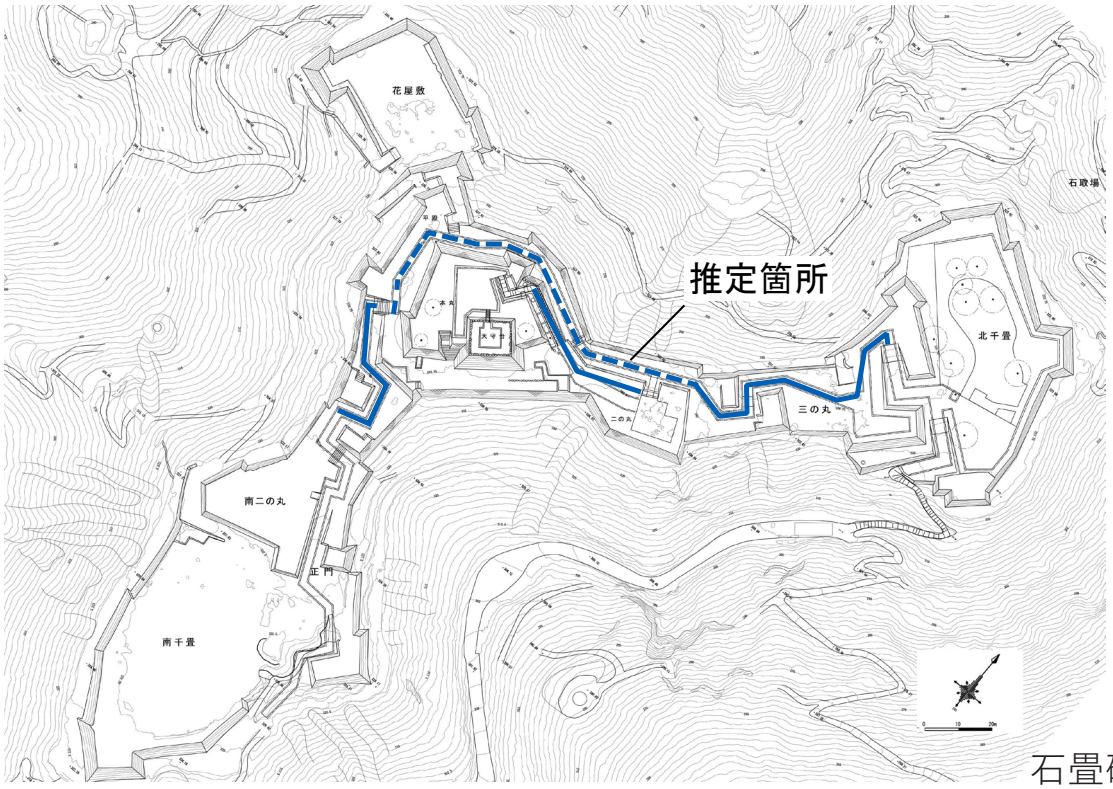
石畳

二の丸北西側において延長約 18m、幅約 120 ㎝の石畳を確認しました。石畳は北西石垣に平行して、ほぼ直線上に作られています。この調査により、既往調査で確認されていたものと合わせると三の丸から二の丸、平殿、南二の丸周辺に敷設されたことがわかりました。全国でも石畳が確認されている山城は非常に少なく、とても貴重です。これだけの大規模な普請は、赤松氏のみによる事業ではなく豊臣政権の支援がうかがい知れます。

石畳（西端部）　北東より

石畳（中央部）　北東より

石畳取付部　南東より



石畳確認箇所

石組排水溝

二の丸中央部から東西方向に延びる石組排水溝を確認しました。花崗岩製で溝の大きさは幅約 30 ㎝、深さは約 22 ㎝です。溝の底部には薄い石が敷かれており、丁寧につくられています。西端のトレンチでは確認されませんでした。この排水溝は近くに建物礎石があることから、建物の周囲に張り巡らせて雨受けの機能をもつものと考えられます。また排水溝が見つかったトレンチの南側からは近代の崩落も確認しました。

礎石と排水溝（南東より）

排水溝と石畳（東より）

建物礎石

東側トレンチから原位置を保っていると考えられる 2 石の礎石を確認しました。礎石の大きさはそれぞれ約 50 ㎝、約 70 ㎝を測ります。北東隅からは石垣の築石を確認しました。この築石は昭和 40 年代の石垣大修理の際に、使用されずにゴミと一緒に放り込まれたと思われます。

なお、建物配置の全容について課題が残りましたが、今後の学術調査において明らかにしていきたいと考えています。

礎石（南東から）

礎石（北西から）

まとめ

以上のように今回の調査では新たに石畳、排水溝、建物礎石を確認することができ、竹田城の在城期を知ることができる重要な成果になりました。今回の調査で得られた情報は来年度の整備に活用していく予定です。

朝来市教育委員会文化財課
〒 669-5153　兵庫県朝来市山東町大月 91-2　TEL：079-670-7330　FAX：079-670-7333